真草千字文

書の道

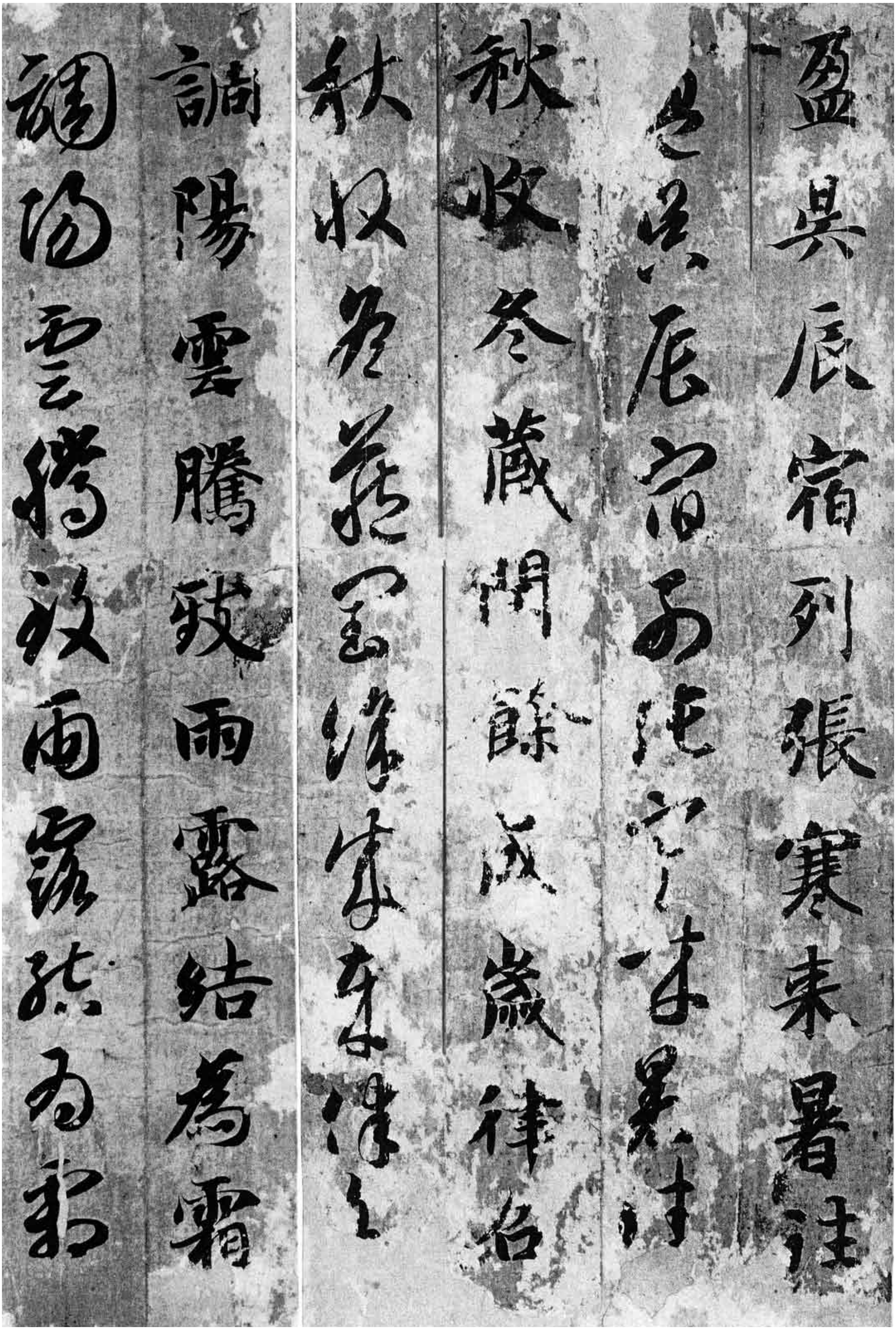
No.482
令和2年 10月号

眞草千字文。勅員外散騎侍郎周興嗣次韻。
天地玄黃。宇宙洪荒。日月

真草千字文。勅員外散騎侍郎 周興嗣次韻。
天地は玄黄。宇宙は洪荒なり。日月は

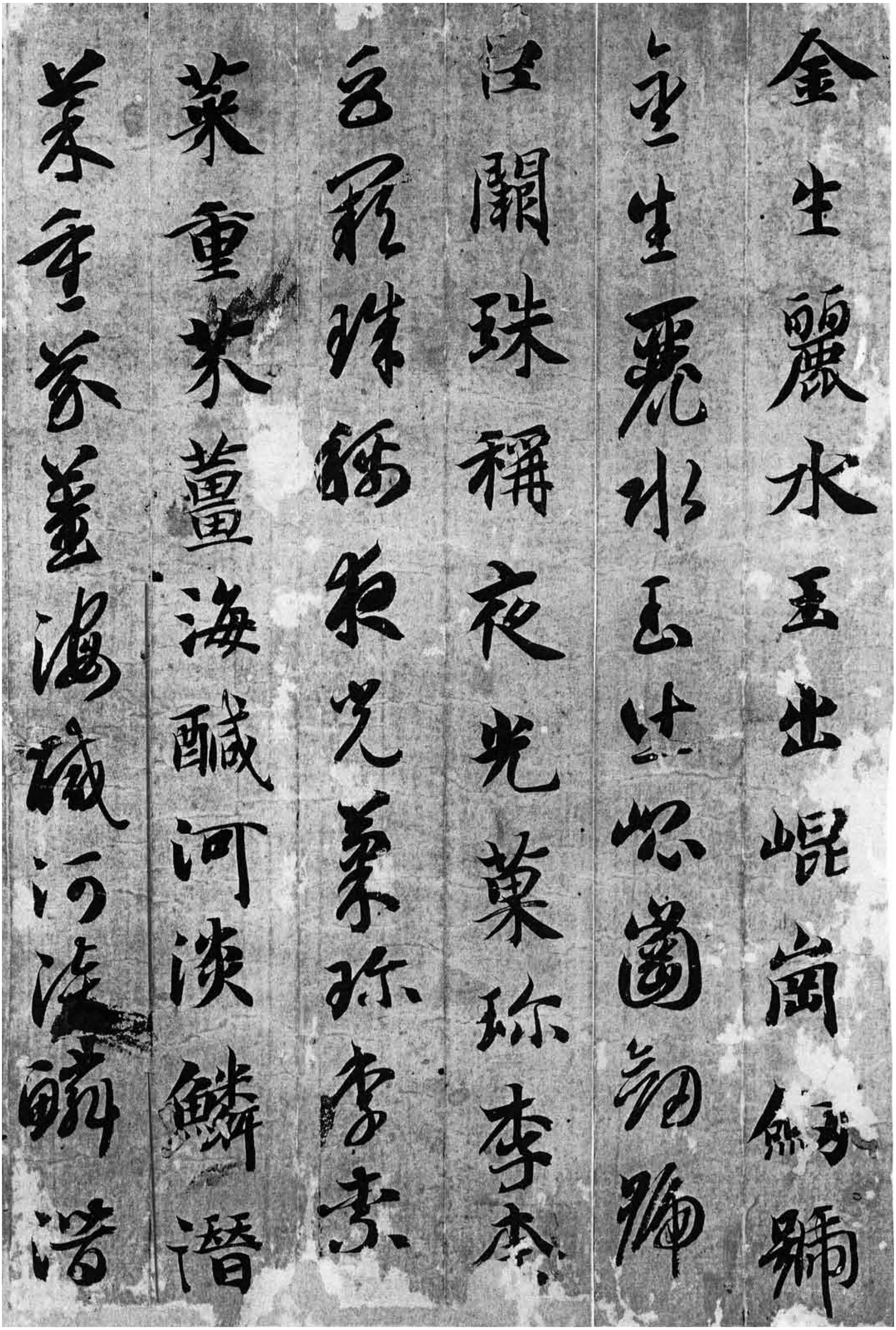
盈昃。辰宿列張。寒來暑往。秋收冬藏。閏餘成歲。律召

盈昃し、辰宿は列張す。寒さ来り暑さ往き、秋収めて冬蔵す。閏餘もて歳を成し、律呂は



調陽。雲騰致雨。露結爲霜。金生麗水。玉出崐崗。劍號

調陽す。雲は騰りて雨を致し、露は結びて霜と為る。金は麗水に生じ、玉は崑岡に出づ。剣は〔巨闕と〕号し、



巨闕。珠稱夜光。菓珎李柰。珠は夜光と称す。菓は李柰を珍とし、

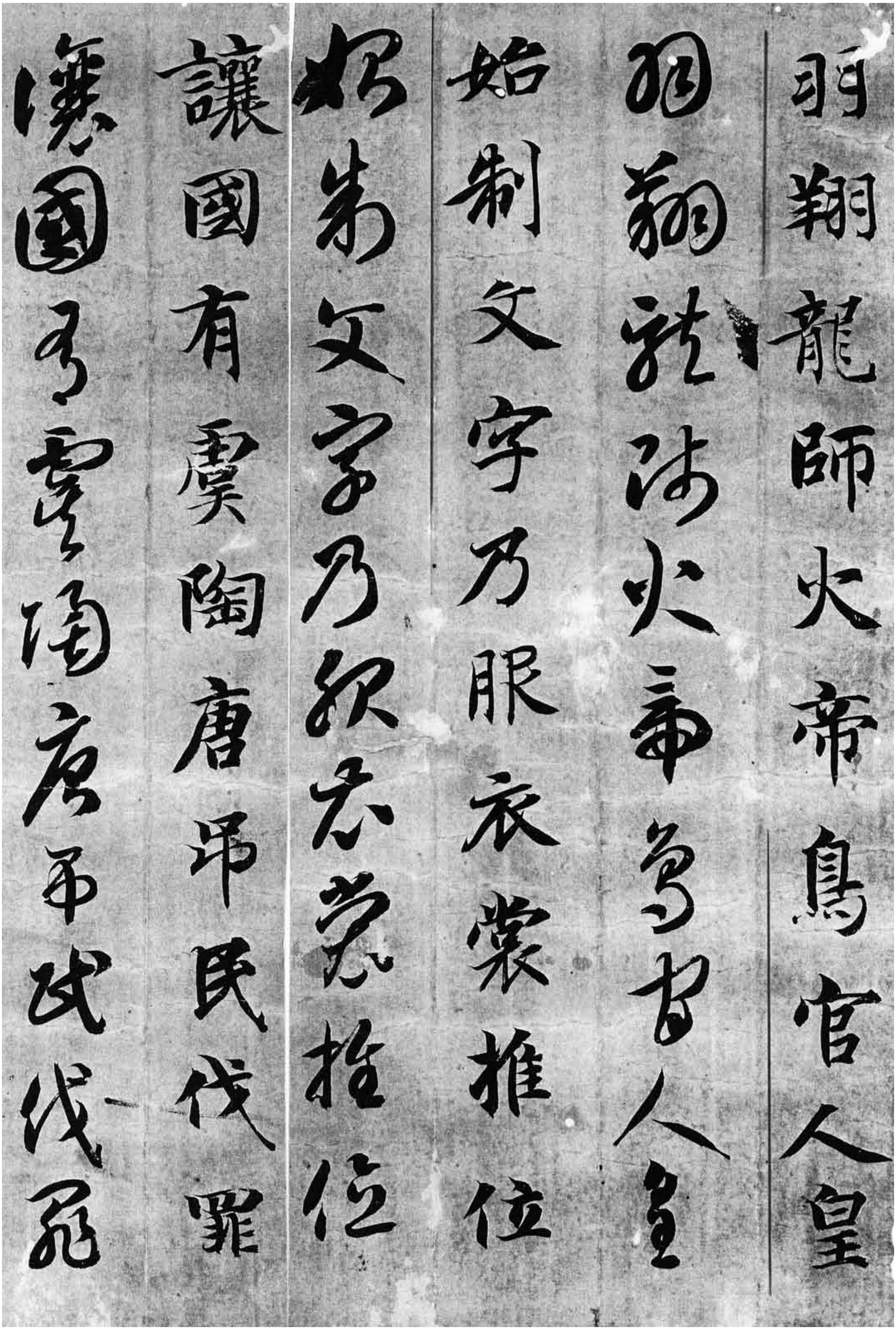
菜重芥薑。海鹹河淡。鱗潛 菜は芥薑を重んず。海は鹹く河は淡し、鱗は潜み

羽翔。龍師火帝。鳥官人皇。

羽は翔ける。龍師火帝、鳥官人皇。

始制文字。乃服衣裳。推位

始めて文字を制り、乃ち衣裳を服す。位を推し

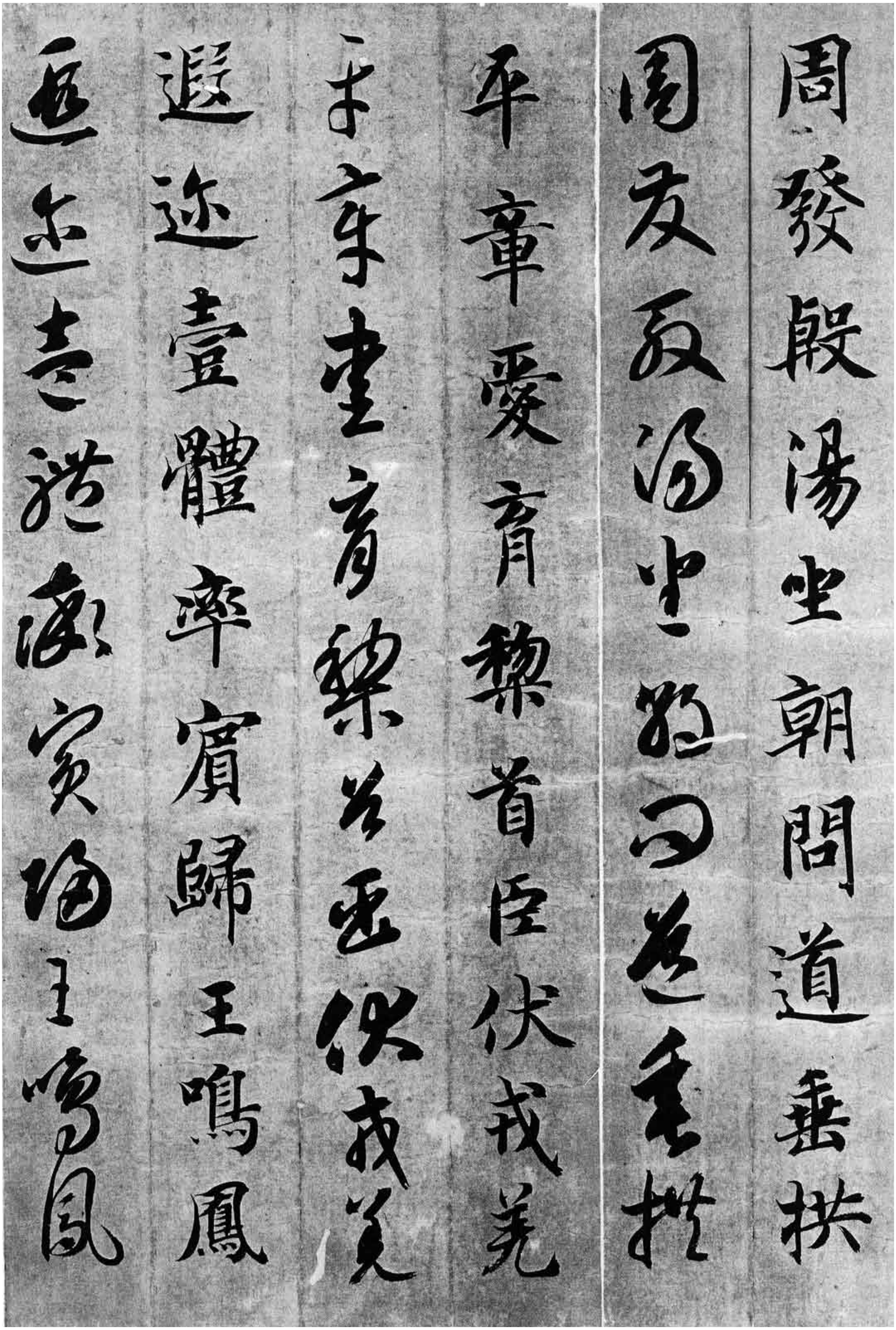


讓國。有虞陶唐。弔民伐罪。

国を譲るは、有虞と陶唐なり。民を弔い罪を伐つは、

周發殷湯。坐朝問道。垂拱

周発と殷湯なり。朝に坐して道を問い、垂拱し



平章。愛育黎首。臣伏戎羌。　平章す。黎首を愛育し、戎羌を臣伏せしむ。

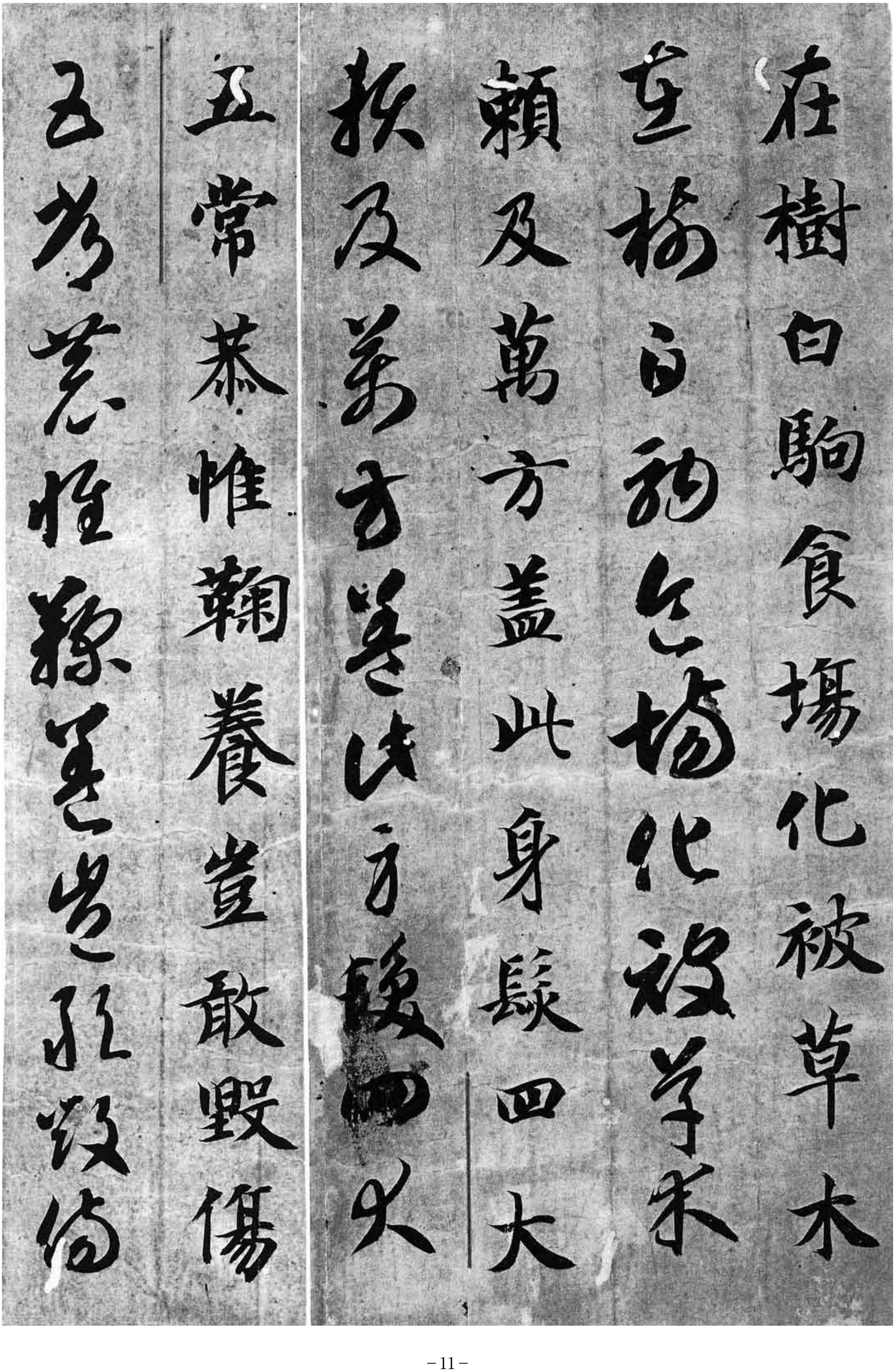
遐迩壹體。率賓歸王。鳴鳳　遐邇体を壱にし、率賓して王に帰す。鳴鳳は

在樹。白駒食場。化被草木。

樹に在り、白駒は場に食む。化は草木を被い、

賴及萬方。蓋此身髮。四大

頼は万方に及ぶ。蓋し此の身髪は、四大

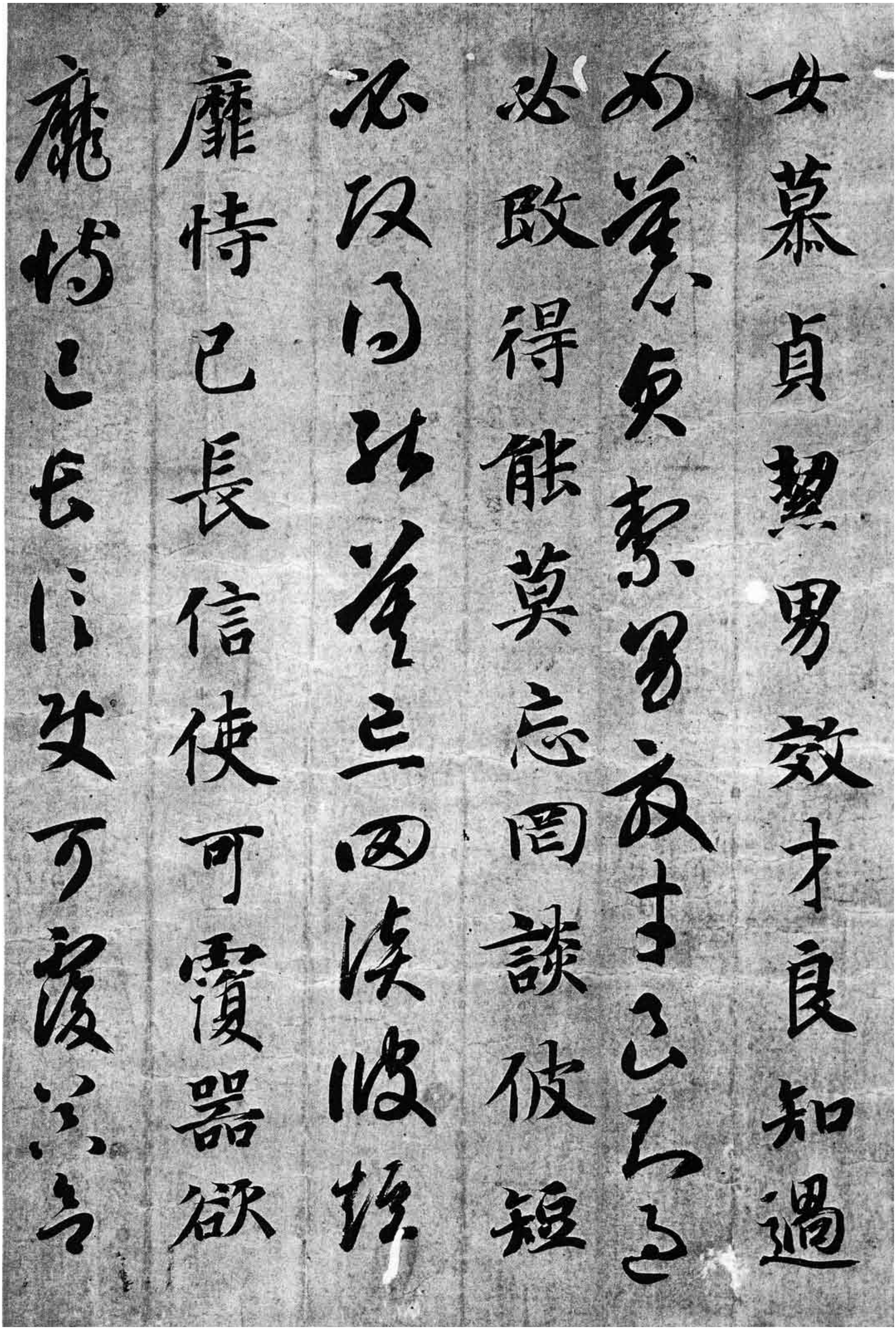


五常。恭惟鞠養。豈敢毀傷。

五常なり。恭しく鞠養を惟えば、豈に敢えて毀傷せんや。

女慕貞絜。男效才良。知過

女は貞潔を慕い、男は才良に効え。過ちを知らば



必改。得能莫忘。罔談彼短。

必ず改め、能くすることを得て忘る莫かれ。彼の短を談ずる罔かれ、

靡恃己長。信使可覆。器欲

己が長を恃む靡かれ。信は覆む可からしめ、器は

千字文について〔五〇二年から五二一年の間に制作された〕

日本には、「いろはに…」すべて異なる四十八文字を用いた文章がある。これと比較にはならないが、四字を一句とする二五〇句から成る、すべて異なる千の文字を用いた文章である。これを千字文と呼ぶ。千字文の成立には幾つかの説がある。

1、後漢の三代目の孝章帝（在位七五～八八）が作ったとする説。
2、魏の鍾繇（一五一～二三〇）が作った説。
3、周興嗣（四六九～五二一）が整理した説。
4、梁の高祖武帝の作とした説。
5、梁の高祖武帝（在位五〇二～五四九）が王子たちの手本となるようにと、王羲之の書の中から殷鉄石に重複なしの千の文字を収集させ、周興嗣（南朝の斉と梁に仕えた官僚であり、文章家）に文章として完成させ、韻文にまとめたものという説。

5の説が現在の主流となっている。周興嗣は一夜にしてこの千字文を完成させたが、周興嗣の髪は白くなったと語られている。内容は、自然現象始からはじまり、人間の穀物などに対する取り組み、自然に対する発見、人間が作りだしたもの、歴史に対する事項、政治に対する活動と変遷、生き物に対する活動状況、人間の生き方や教育、学習などをあらわしている。その一部を紹介する。

（大琳）

日月盈昃

日は夕方、西に傾き月は三十日に一度満ち欠けし、星は各々の止まる宿があって大空に敷きつらなっている。

秋収冬蔵

秋には春と夏に蒔（ま）いた穀物を収穫し、冬にそなえてそれらを蔵にたくわえる。

閏餘成歳

閏（うるう）月をもうけて歳を調える。

海鹹河淡

海の水は塩からく河の水は淡白である。

鱗潜羽翔

魚（鱗）は水中に潜んで生活し鳥は空中を飛びまわる。

龍師火帝
鳥官人皇

中国古代の帝王には龍の字を官名につけた伏犠氏。火の字を官名につけた神農氏。また鳥を官名にした少昊氏。また太古には天皇地皇人皇の三皇の世があった。

始制文字

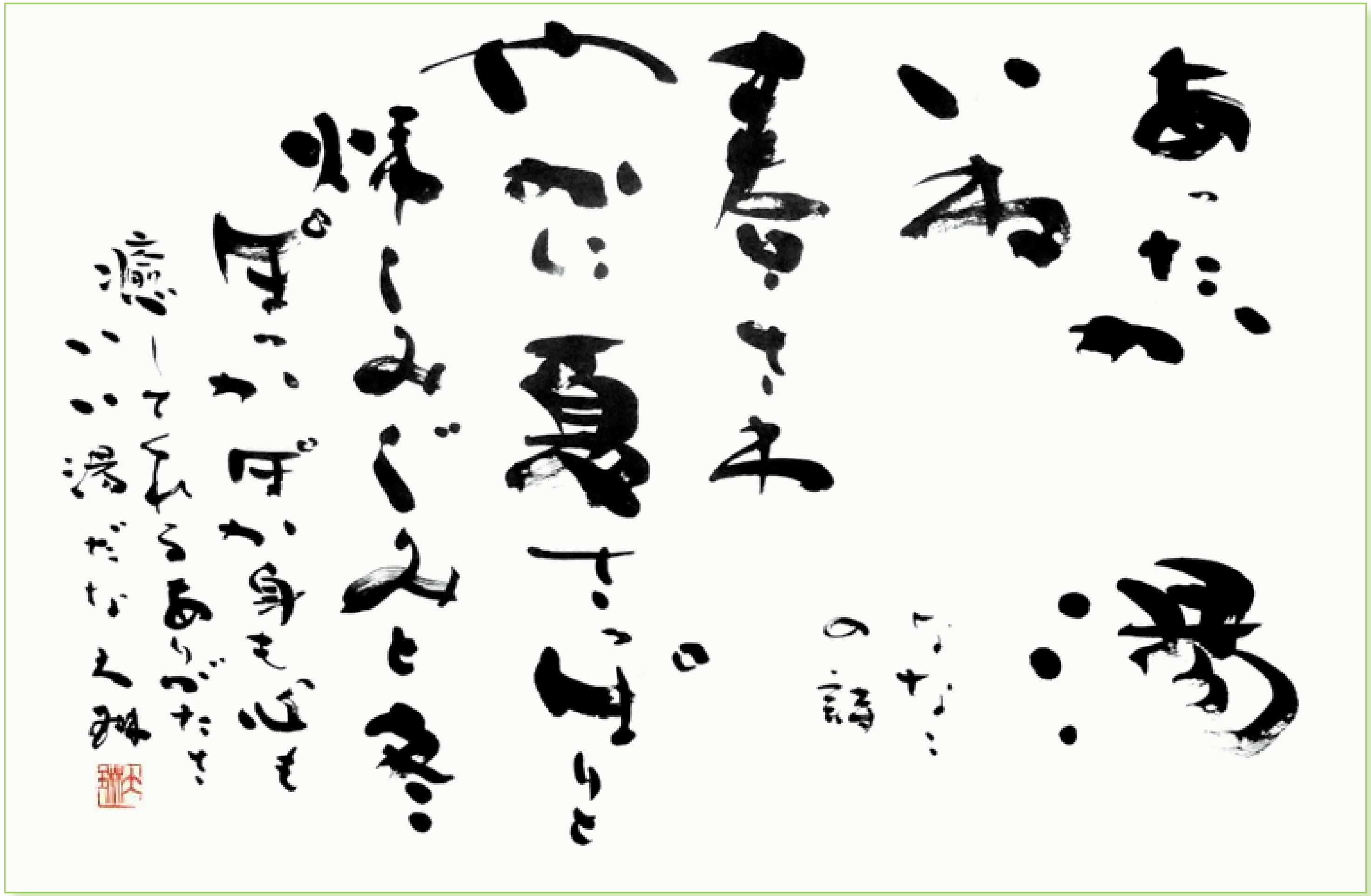
縄を結び、文字の代用にしていたが、黄帝の時、蒼頡がはじめて文字を作った。

…譲国
有虞陶唐
弔民伐罪
周発殷湯

尭は舜に国をゆずり、舜は禹に天子の位をゆずり、殷の湯王は夏の桀王が民をしいたげているのを見て忍びずこれを討ち、周の武王は殷の紂王が民を苦しめることに見るにたえずこれを討った。

四大五常

人間の身体は地、水、火、風の四大元素によって成り立ち、身体の精神的心の存在には仁、義、礼、智、信の五つの徳がそなわっている。



2020 10 October						
Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

あったかいね
春さわやかに
夏さっぱりと
秋しみじみと
冬ぽっかぽか
身も心も癒してくれる
ありがたさ
いい湯だな

「湯」
ななこの詩